



ひめゆり平和新館資料館

資料館だより



解散命令後、猛攻撃を受けた山城の丘にて。仲里正子証言員 2015年10月31日

目次

- 次世代の平和講話 最初の1年をふりかえって・1
- 資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
教員のための展示ガイドツアー／戦後70年特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」開催中／特別展図録『ひめゆり学徒隊の引率教師たち』発行／2015年度 ひめゆりガイド講習会／平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会に出席／第22回日本平和博物館会議に出席／2015年度日本平和学会秋季研修大会に参加／長崎市継承フォーラムに参加
- 2016（平成28）年度のイベント・事業・・・・・・・・6
- コラム 相思樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
- 統計に見る2015年度・・・・・・・・・・・・・・・・7
- ひめゆり研究ノート⑩ ひめゆりの塔の歴史（後編）・・9
- 仲宗根政善日記抄（53）・・・・・・・・・・・・11
- 本棚（仲程昌徳）・・・・・・・・・・・・・・13
- 声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
- 資料館の動き（2015年度）・・・・・・・・・・14
- 資料館ガイド・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第57号

2016.5.31

次世代の平和講話 最初の1年をふりかえって

2015年4月より、説明員・学芸員による「次世代の平和講話」がスタートし、1年が経ちました。

当館では、開館当初より、ひめゆり学徒隊の生存者である証言員が戦争体験講話を行ってきましたが、証言員が年齢を重ね、これまで通りの対応が難しくなるなか、戦争体験講話は2015年3月で原則終了となりました。次世代の平和講話は、それにとまってスタートすることとなりました。

非体験者による講話は、当館にとっては新しい試みでもありました。本稿では、1年間の取り組みの成果や課題などを報告します。

1. 実施件数

	講 師	2014年度	2015年度
次世代の平和講話	説明員・学芸員	—	192回
説明員トーク	説明員・学芸員	39回	50回
元ひめゆり学徒の戦争体験講話	元ひめゆり学徒	241回	18回

- ・「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」は、2015年度は、①「次世代の平和講話」の予約団体が、体験者の講話を希望し、当日、証言員が対応可能である場合、②イベントなど、に限って実施しました。
- ・「説明員トーク」は2014年度開始。「平和への祈り」や「アニメ『ひめゆり』」などの25分程度の映像視聴に加えて、説明員・学芸員が解説を行うものです。

2. 次世代の平和講話の構成と内容

- ・約35～45分の講話の中で、必ず元ひめゆり学徒の証言映像を視聴します（約15分）。
- ・この映像は、おひとりの方の証言映像です。この方の語りと体験を通して、沖縄戦に迫っていきます。
- ・証言映像の他にも、写真や地図、絵などを適宜使って講話を行います。
- ・現在、体験者の“気持ち”に焦点を当てたお話しをすることが多くなっています。沖縄戦当時の気持ちや考え方、戦争を生き残って抱えた気持ちや、体験を経て知ったこと、若い世代に伝えたいことなどです。
- ・事前学習や平和学習全体の内容に合わせて、沖縄戦の概要などをお話しすることもあります。

導入のお話	元ひめゆり学徒の証言(映像)	解説のお話
約10分	約15分	約15分

3. 聴講者の声より

平和講話の中で視聴する証言映像について、「私はその時、初めて戦争体験者の方のお話しを聞きました」（高校生）、「宮良さんのお話しを聞きました」（高校生）など、映像ではあっても、“体験者の話を聞いた”と受け止めたことがわかる感想がありました。他にも映像で語られた出来事を具体的に記した感想などが寄せられています。

また、「体験者の映像もあって貴重だった」（教員）、「体験者の視点とは違う視点で説明もされていたので、これまでとはまた違うかたちでも知る事ができた」（教員）など、証言映像と説明員・学芸員の話が組み合わさっていてよかった、という声をいただきました。説明員・学芸員の話は「客観的」「解説」「整理」「ストーリー」「違う視点」といった言葉で評価されています。

「証言のお話の中の気持ちの部分を解説して下さった」、「見るだけよりもこうしてちゃんと話を聞いた方がいいですね。生き残った人たちにもつらさがあったということは分からないことだと思うので」(教員)など、気持ちや生存者の戦後をとりあげた内容についての評価がありました。また、「ここでしか聞けない話」(教員)、「生き方を伝えられた」(教員)といった声もありました。

「若い係員の方が懸命に学徒隊の真実を伝えようとしている姿を見て、かえって後世へ伝えていくことの大切さを感じました」(高校生)、「体験者の方と一緒にいられて継承されているんだなあというのが良くわかりました」(添乗員)など、非体験者が語っていることそのものについて触れたものもありました。

4. 課題—講師(説明員・学芸員)の実施記録より

講師となっている説明員・学芸員は、下記のような課題をあげています。

- ・引率の先生方に伝わっている話が、生徒にはうまく伝わっていない。聞き手が理解できるかたちを工夫する必要がある。
- ・大人には理解できても、中高生には難しい話があるのではないか。話題(内容)の見直しも必要ではないか。
- ・限られた時間の中で、内容を盛り込みすぎて、聞き手が受け取れる量を超えている。伝えたいことはたくさんあるが、話題を減らす必要がある。
- ・聞き手の理解度や関心を知り、対応する必要があるが、まだ十分できていない。
- ・「次世代の平和講話」を聞いたことがない先生方や添乗員さんから、内容を心配する声があった。講話の内容をわかりやすく伝える必要がある。



職員による講話

(説明員 仲田晃子)

資料館トピックス

◆教員のための展示ガイドツアー

3月27日、「教員のための展示ガイドツアー」を開催しました。児童生徒が興味を持ちそうな展示を中心としたガイドツアーを行い、教員のみなさんにも展示内容をより深く理解してもらいたいと企画したものです。沖縄戦について学びたいがなかなか時間がとれないという方にもご参加いただきたいと考え、夏休みに引き続き、春休みにも実施しました。

当日は、県内から5人、県外から2人の計7人が参加し、参加した小学校教員の方からは「体験者が少なくなり、学校で体験者の講話を聞くという平和学習が難しくなっている。こういう資料館に来て、教員も生徒と一緒に学ぶことが大事だと感じました」という感想が出ていました。



説明員による展示ガイドツアー

◆戦後70年特別展 「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」開催中

2015年12月22日から、戦後70年特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」を開催しています。この特別展では、ひめゆり学徒隊の引率教師に初めて焦点を当てました。

沖縄戦では、20代から50代までの18人の教師が生徒とともに戦場に向かい、そのうち13人が命を落としました。生徒とともに戦場で行動し、様々な岐路に立たされた教師たちの葛藤や苦しみ、そして生き残った教師たちの多くの生徒を失った悲しみと自責の念、戦後の思いなどが読み取れる内容になっています。あの時代の教師の体験を改めて見つめ直すことは、時代の潮流が戦争へと向かっているようにも思える今、とても重要なことだと考えています。

新作証言ビデオ「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」(約13分)も会場にて上映しています。

2017年3月31日まで開催予定です。多くの方のご来場、お待ちしております。

来館者の声(特別展アンケートより抜粋)

○教師が戦争中に果たした役割、胸にせまり、つらかったです。仲宗根先生の「いくら言い訳しても…」の言葉、忘れずに教師をやっていきたいと思います。「今こそ」の大切な特別展でした。(2015年12月26日 大阪府 55歳 女性)

○ひめゆりの先生たちがどのような思いで生徒を率いたか、また、どのようにして生徒を守ろうとしていたのかがわかり、とても感慨深いものだった。自決をさせない、というところに生徒への愛を感じた。先生1人1人に考えがあり、いろいろ違いがあったが、すべての先生が生徒のことを考えていたことがつたわった。(2015年12月29日 北海道 17歳 男性)

○先生方の一覧表があって、その後に続く証言を読みながら、その人となりなどが想像でき、当時の出来事がよりリアルにせまってくるようで、とても感慨深いというか、涙もこみあげてきました。(2016年4月2日 沖縄県 女性)



テープカットの様子



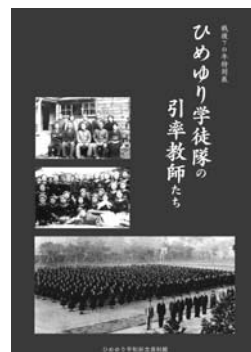
担当学芸員による展示解説

◆特別展図録『ひめゆり学徒隊の引率教師たち』発行

特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」の図録を発行いたしました。全ての展示テキストや実物資料の紹介、新作証言映像のシナリオなどに加え、展示ではスペースの都合上紹介できなかった証言やコラムを追加し、更に充実した内容となっています。

当館にて販売中です。通信販売も可能ですので、お問い合わせ下さい。

○A4版/62頁 ¥1,000(税込)



◆2015年度 ひめゆりガイド講習会

日ごろ沖縄戦を伝える活動に携わっているガイドの方々を対象に、「2015年度 ひめゆりガイド講習会」を3月14日に開催し、53人が参加しました。定員超過のためご参加いただけなかった方を対象に、3月28日に追加開催し、19人が参加しました。両日とも、参加者の大半がバスガイドや学生ガイドなどの若い世代でした。

第1部「証言員（ひめゆり学徒生存者）との質疑応答」には、14日は7人、28日は2人の証言員が出席し、質問にお答えしました。証言員の生の声や気持ちを聞いた参加者からは、「証言員のみなさんの大きな思いがあふれてくるように感じ、とても胸が打たれました」、「体験者が戦争を知らない人に何を伝えたいのか、分かりました」などの感想が寄せられました。

第2部では、グループに分かれ、当館の学芸員と説明員が展示室とひめゆりの塔敷地を案内しました。参加者からは、資料館がどのような経緯でつくられたのかを初めて知った、展示内容の意味を深く理解できた、などの声をいただきました。

外国人を案内するための講習会を企画してほしい、他の参加者と意見交換をしたいなどアンケートのご要望も参考にして今後も充実をはかりたいと思います。



質疑応答にこたえる証言員



職員によるガイドツアー



追加開催での質疑応答の様子

◆平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会に出席

2015年10月24日・25日の2日間、愛知県で開催された「平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会」に副館長の普天間朝佳が出席しました。

交流会では山梨平和ミュージアムなど9館からの報告と、豊川海軍工廠跡地と鷹来工廠跡地の保存をめぐる2つの報告があり、当館からも昨年4月から始めた「次世代の平和講話」の状況を報告しました。子どもたちに関心を持たせるにはどうしたらいいか、体験者からの継承をどのように進めていくかなど、様々なテーマについて意見や情報交換が行われました。



報告を聞く交流会の参加者

◆第22回日本平和博物館会議に出席

2015年11月19日・20日の2日間、神奈川県で開催された「第22回日本平和博物館会議」に、館長の島袋淑子と副館長の普天間朝佳が出席しました。今年は「日本平和博物館加盟館の学芸員やガイド関係者などの研修会を共同で開催する件について」や「全国語り部講演会の実施（語り部サミット〈仮題〉）について」など6つのテーマについて話し合われました。

「学芸員等の研修」については、各館とも参加する方向で検討していくという結論に至りました。一方「全国語り部講演会の実施」については、体験者が高齢化しているため実施は難しいのではないかとということになりました。当館では、体験者による講話は原則として終了しており、現在は職員による「次世代の平和講話」を実施していることを報告しました。



会議で報告をする島袋館長

◆2015年度日本平和学会秋季研修大会に参加

2015年11月28日・29日に全国から平和のための研究を行う研究者や教員などが参加する「日本平和学会2015年度秋季研修大会」が琉球大学で開催され、当館職員が参加しました。

28日は、平和教育ブース展示会場で、当館の次世代継承活動を紹介するポスター展示、公式ガイドブック、リーフレットを設置し、参加者への広報活動を行いました。

午後は、平和教育ワークショップに参加しました。沖縄での平和学習旅行について活発に意見交換が行われました。

29日は、当館学芸員の古賀徳子が、平和教育分科会で「ひめゆり平和祈念資料館におけるワークショップの可能性」と題し、ひめゆり学徒隊をテーマにしたワークショップができるまでの過程や、学校現場へ広く普及させていくにはどうすればよいのかという課題を報告しました。両日ともに有意義な意見交換の場となりました。



学芸員による平和学会での報告

◆長崎市継承フォーラムに参加

2015年12月20日に、長崎市主催の被爆70周年記念フォーラム「語り継ぐ家族の被爆体験（家族証言）」が長崎原爆資料館ホールで開かれ、座談会「未来へ、被爆・戦争の体験を語り継ぐということ」に、当館説明員の仲田晃子がパネリストとして参加しました。長崎、広島、沖縄で被爆や戦争体験の継承に関わる4人が登壇し、活動の紹介や課題、意義などを話し合うもので、約80人の来場者がありました。

当館からは、説明員・学芸員による平和講話の取り組みを紹介し、体験者の証言映像を使って講話を行うことや、多様な来館者に対応する意義などをお話しました。広島市の被爆体験伝承者の山岡美知子さん、長崎市の平田周さん、長崎市被爆三世の三根礼華さんから、それぞれの活動を通して感じていることや課題などの報告がありました。

同じ課題に向き合う方々と、それぞれの経験を元に交流を持つことができ、当館の活動へのヒントを得るとともに、各地の仲間の存在に勇気づけられました。



長崎市継承フォーラムのシンポジウム

2016(平成28)年度のイベント・事業

当財団では、今年度、下記のイベント・事業を計画しています。

○イベント

- *ひめゆり平和祈念資料館 教員向け講習会 (2016年8月10日予定)
- *「夏休み平和講話—ひめゆり学徒の沖縄戦」(2016年8月予定)
- *教員のための展示ガイドツアー (7月30日・12月24日予定)
- *ひめゆりガイド講習会 (2017年3月予定)
- *アニメ「ひめゆり」・証言ビデオ「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」特別上映会
(春休み・夏休み・冬休み・ゴールデンウィーク期間中に実施)

○事業

- *次世代職員の平和講話事業
- *ひめゆりの塔の管理及び慰霊祭の挙行 (2016年6月23日)
- *出版
『Himeyuri Peace Museum』(ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック英語版)
『感想文集ひめゆり』第27号、『年報』第27号、「資料館だより」第57・58号
- *ひめゆり関連戦跡壕の調査・保存・活用事業
- *平和研究所の設立に向けた準備作業

相 思 樹

教師の戦争責任

副館長 普天間朝佳



戦後七〇年特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」の準備をする中で改めて考えさせられたのは、「教師の戦争責任」の問題でした。開館後、当館に對して、ある沖縄戦研究者から「生徒を戦場動員した教師の戦争責任を、なぜ追及しないのか」という批判を受けたことがあったからです。

沖縄戦時、生徒を陸軍病院に動員することに疑問を抱く教師はほとんどいませんでした。国民精神総動員体制下、大政翼賛体制下においては、教師たちの思考も社会や時代から自由ではいられなかったのです。

現在の視点から当時の教師たちの軍国主義的振る舞いを批判することはたやすいことです。しかし重要なことは、当時の軍国主義の激流の中で、自分ならどう振る舞えたのかということに想像を巡らせてみるのだと思います。戦後、引率教師の一人である仲宗根政善先生は「あの時は、どうにもならなかったと、どうして言えるであろうか。戦争への歯車にはめこまれ、ひきずられて、戦争へと生徒を引率した教師の責任である。不明にして、さめた眼もたず、戦争へひきずられて行った罪である。その根は深くおそろしい。私は、今もその重い負い目を負いつづけている」と自責の念をつづっています。

今、時代の潮流が戦争へと向かっているように感じると言う戦争体験者は少なくありません。そのような今だからこそ、戦争へとひきずられないために、「明晰でさめた眼」を持ちたいと、この特別展を通して痛感しました。

統計に見る2015年度

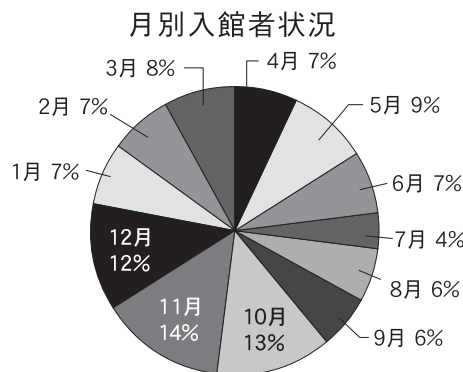
※小数点第1位を繰り上げているため、合計が100%でない場合もある。

1. 総入館者状況(入館料免除を除く)

- ・ 昨年入館者は627,813人(前年の629,440人より1,627人減少)。1か月の平均入館者は52,318人、1日平均は1,725人(慰霊の日、台風休館除く364日)。うち外国人は5,072人。
→開館以来27年間で26番目の入館者数。
- ・ 開館以来26年間の累計は21,058,749人で、年平均入館者数は779,954人、1日平均は2,167人(ただし、1989年度の開館期間は9か月間)。

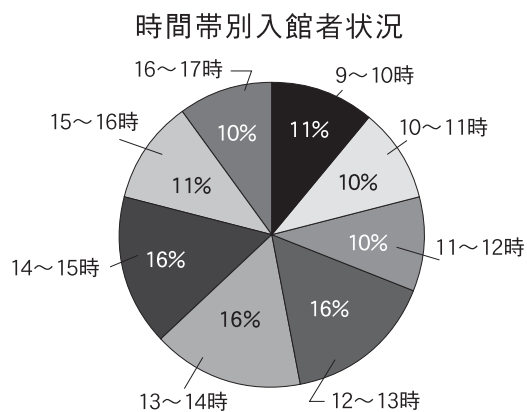
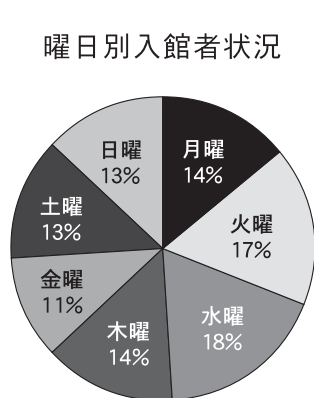
2. 月別入館者状況

- ・ 昨年1年間で入館者が多かった時期は修学旅行シーズンの10月～12月の3か月間。3か月間の合計は243,009人で、総入館者数の39%。
- ・ 入館者数が少ない時期は7～9月。3か月間の合計は99,687人で、総入館者数の16%。



3. 曜日別入館者状況／時間帯別入館者状況

- ・ 曜日別では、週半ばの火・水に集中している。
曜日別：月14%、火17%、水18%、木14%、金11%、土13%、日13%。
- ・ 時間帯では、12時台から14時台までの午後の早い時間帯が少し多い。

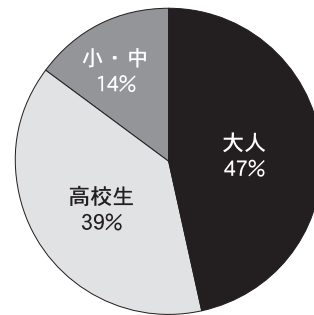


4. 類別入館者数

【総数】入館者の割合は、大人が 47%、高校生 39%（そのうち 98%が団体で入館）、小・中学生 14%（そのうち 75%が団体で入館）。27 年間の平均では、大人が 65%、高校生 24%（そのうち 95%が団体で入館）、小・中学生 11%（そのうち 65%が団体で入館）。

【団体】団体の割合では、特に高校生の割合が 66%と高く、次いで小・中学生 19%、大人 15%となっている。

類別入館者状況（個人・団体含む）



5. 学校団体の入館状況

・昨年度、修学旅行で来館した学校団体は、2,116 校、307,712 人（前年の 2,183 校、314,928 人に比べ - 67 校、- 7,216 人）。内訳は、小学校が 104 校で 5%、中学校が 646 校で 31%、高校が 1,366 校で 65%。

【都道府県別】

- ・小学校 沖縄 48 校、鹿児島 27 校、東京 5 校の順に多い。
- ・中学校 大阪 83 校、岡山 73 校、兵庫 65 校、徳島 48 校の順に多い。
- ・高校 東京 205 校、神奈川 126 校、埼玉 97 校、千葉 87 校の順に多い。
- ・沖縄の中学・高校の全体に占める割合は、それぞれ中学 3%、高校 0.4%。

【月別】

- ・11 月 16%、12 月 16%、10 月 15%、5 月 14%の順に多く、4 か月間で全体の 61%を占める。
- ・小学校 6 月 30%、5 月 20%、11 月 15%の順に多い。
- ・中学校 5 月 38%、4 月 21%、6 月 13%の順に多い。
- ・高校 10 月 22%、11 月 22%、12 月 19%の順に多く、3 か月間で全体の 63%を占める。

6. 入館料免除

入館料免除総数 37,432 人

・団体（県内学校団体・特別支援学校・一般団体含む）	177 団体	8,096 人
・学校団体引率者		19,799 人
・修学旅行下見	565 校	1,526 人
・個人免除者（身障者手帳等提示の方）		4,786 人
・慰霊の日（6 月 23 日）		3,225 人

※沖縄県内学校団体は、入館料免除となるため、総入館者数には含まれない。ただし、学校団体の総数及び人数には含まれる。



ひめゆり研究ノート⑩



ひめゆりの塔の歴史(後編)

1957(昭和32)年 沖縄戦13回忌 「新しいひめゆりの塔」建設

- ・1957(昭和32)年 南部戦跡美化運動行われる。玉那覇正吉氏、新しいひめゆりの塔を建設
1956(昭和31)年4月、日本遺族会主催の沖縄巡拝団が来沖¹、同年南部戦跡巡りをした南陽相互銀行の大城清英頭取が南部戦跡の意外な荒廃ぶりを見て、南部戦跡の美化運動を思い立つ²。翌1957(昭和32)年1月「南部戦跡美化建設準備委員会」を開催し、6月にかけて南部戦跡の美化運動が行われた。具体的には、1月に清掃人を雇い南部戦跡の掃除を開始³、「新しいひめゆりの塔」を建設⁴、ひめゆりの塔敷地に石灯笼を設置、付近に休憩所や便所、お土産販売店を建設、女神の像を納骨堂正面から右側へ移転など⁵を行った。「新しいひめゆりの塔」は、1948(昭和23)年建設の納骨堂をコンクリートで覆う形で造られ、白百合のレリーフが取り付けられている。
- * 同年7月、那覇市識名に戦没者中央納骨所が建設され、各慰霊の塔の遺骨が転骨されている。
- ・1959(昭和34)年8月26日、井伊文子氏の歌碑を建立⁶
「ひめゆりのいしぶみにふかくぬかづけば たいらぎをこひのむ乙女らの声す」
この歌は最後の琉球王尚泰の曾孫で滋賀県彦根市長夫人井伊文子氏が滋賀県物産振興会使節団の一員として来沖した際に詠んだもの。同じく使節団の一員であった彦根市在の清水一郎氏(清水バルブ社長)が一切の費用を負担しひめゆりの塔敷地内に建立した⁷。
- * 1961(昭和36)年、沖縄戦17回忌で、「沖縄戦終結十七周年戦没者大慰霊祭」を挙行。同年、琉球政府社会局と那覇日本政府南方連絡事務所による大々的な遺骨収集も行われ、伊原第一外科壕などでも遺骨収集が行われた⁸。
- ・1963(昭和38)年6月、ひめゆりの塔のガマの周囲に玉垣(木製の柵)を設置
ひめゆりの塔に登ったり、ガマ内に入ったりする人がいたために玉垣が設置された⁹。

- * 1967(昭和42)年3月、ひめゆり学徒をはじめとする女子学徒戦死者88人に勲八等宝冠章が贈られる。
- ・1968(昭和43)年、ひめゆり同窓会とひめゆり遺族会が折半で伊原第一外科壕の土地を購入¹⁰。
- * 同年1月、ひめゆり同窓会館を建設。同窓会館内に仏壇がつくられ、位牌の代わりに、亡くなったひめゆり学徒や教師の名前が書かれた紙が安置された¹¹。

1972(昭和47)年 沖縄の「日本復帰」

- ・1972(昭和47)年8月15日、荒崎海岸に「ひめゆり散華の跡」碑を再建
1949(昭和24)年に建立された荒崎海岸の「ひめゆり散華の跡」碑が風化し倒れていたため、遺族や同窓生、同窓会の寄付によって再建¹²。
- * 1973(昭和48)年3月ごろ、最初のひめゆりの塔が二つに折れていたのを仲宗根政善がセメントで補修¹³。
- ・1974(昭和49)年、ひめゆりの塔の周囲の柵をコンクリート製の擬木に変え、伊原第一外科壕の説明碑を設置
木製の囲いが老朽化し、ひめゆりの塔に刻まれた教師・生徒の名前が摩耗していたため、柵をコンクリート製の擬木に変え、名前を御影石に刻み、ひめゆりの塔に取り付けた。費用は約300万円¹⁴。同年、伊原第一外科壕の説明碑も設置¹⁵。相思樹会の要望により教師・生徒の遺影の収集を始める¹⁶。

1975(昭和50)年 沖縄国際海洋博覧会

- ・1975(昭和50)年6月、献花台を御影石製に変え¹⁷、「ひめゆりの塔の記」を設置¹⁸
「ひめゆりの塔の記」の文は仲宗根政善氏、揮毫は佐久本興吉氏。
- * 同年7月17日、海洋博に出席するために来沖した皇太子夫妻にひめゆりの塔前で火炎瓶が投げられる。

1977(昭和52)年 沖縄戦33回忌

- ・同年4月1日、「ひめゆりの塔の門並びに境内での商行為は一切禁止する」の看板を設置
ひめゆりの塔敷地での花の押し売りを禁止するために、ひめゆり同窓会、沖縄県援護課、糸満

市観光課の話し合いの結果、看板が設置された¹⁹。

- ・同年6月、三十三回忌のひめゆりの塔慰霊祭行われる
源ゆき子同窓会会長が祭文で「今年はウワイスコー（弔い上げ）ですが、これで終わりとはしません。私たちはみなさん方と、あの戦争を忘れることはできません。戦争体験を伝えていくのが私たちの使命ですし、恒久平和の新たな出発点とします」と参列者によびかけた²⁰。戦死した先生、生徒のアルバムが供えられた。
- ・同年、「ひめゆり散華の跡」碑までの荒崎海岸の小道にコンクリートを敷設²¹
- ・1979（昭和54）年1月30日、ひめゆりの塔敷地の東側にトイレを設置（汲み取り式）
- * 同年2月、糸満市摩文仁に国立沖縄戦戦没者墓苑を建設。
- * 同年3月、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女子学校の戦後34年目の卒業式を実施。
- * 1980（昭和55）年、全国の8都市と那覇市で朝日新聞社・沖縄タイムス社共催「あれから35年 ひめゆりの乙女たち」展を開催。
- ・1981（昭和56）年6月、慰霊祭の主催がひめゆり遺族会からひめゆり同窓会へ引き継がれる²²

1982(昭和57)年 ひめゆり同窓会総会にて「ひめゆり記念館」の建設を決定

- ・1984（昭和59）年5月1日、塔敷地入口に花売り小屋を建築
花の押し売りが問題となっていたため、専用の花売り小屋が建築され、そこでのみ販売されることになった。敷地をひめゆり同窓会が提供、建築資金は沖縄県と糸満市が折半した²³。
- ・1985（昭和60）年3月18・19日、資料館建設に向け伊原第三外科壕の遺骨・遺品収集

1989(平成元)年 ひめゆり平和祈念資料館開館

- ・1990（平成2）年2月26日、聖現寺にあったひめゆり学徒の位牌を閉眼し、ひめゆりの塔へ合祀する²⁴
- ・1992（平成4）年11月、伊原第三外科壕保存のための地盤・地質調査を実施
その際に納骨堂の一部を開け、内部の確認と写真撮影を行う。
- ・1994（平成6）年、ひめゆりの塔敷地のトイレを改築
場所を東側から西側へ移動し、水洗式にした。
- ・2009（平成21）年、開館20周年記念事業とし

てひめゆりの塔域の環境整備を行う

ひめゆりの塔の改修（白い大理石が貼られ、ブロンズ製の百合のレリーフに取り替えられた）、案内板の設置、資料館出口通路の設置、「第三外科職員の碑」「ひめゆりの石像」「女神の像」の移設、植栽整備、資料館玄関にパーゴラ設置。

（学芸課 普天間朝佳）

-
- 1：沖縄県遺族連合会著『還らぬ人とともに—沖縄県遺族連合会30周年記念誌—』（財団法人沖縄県遺族連合会 1982）P 389 / 「沖縄タイムス」1956年4月18日夕刊
 - 2：「沖縄タイムス」1957年1月5日朝刊3面
 - 3：「琉球新報」1957年1月5日朝刊3面
 - 4：ひめゆり平和祈念資料館蔵「ひめゆりの塔の記」（仲宗根政善日記）1957年3月20日付に「金城和信氏の計らいで南陽相互銀行の大城頭取と会って、同氏からひめゆりの塔を立派にしたいと言われた」「玉那覇正吉氏にひめゆりの塔の設計を依頼している」という記述があり、宮良薫編『玉那覇正吉作品集』（玉那覇吉子1985）の巻末の玉那覇正吉年譜には「1957年ひめゆりの塔『百合の花』の浮彫制作」とある。
 - 5：「琉球新報」1957年5月7日朝刊3面
 - 6：「琉球新報」1959年8月27日朝刊
 - 7：「琉球新報」1959年8月8日夕刊
 - 8：前掲『還らぬ人とともに—沖縄県遺族連合会30周年記念誌—』P 190、P 220
 - 9：「琉球新報」1963年6月2日朝刊
 - 10：ひめゆり平和祈念資料館所蔵「ひめゆり同窓会議事録」1968年7月27日理事会
 - 11：2014年9月1日、ひめゆり学徒隊生存者本村ツルへの聞き取りによる
 - 12：ひめゆり平和祈念資料館蔵「ひめゆり散華の跡」碑再建に関する資料（ひめゆり学徒隊生存者宮城喜久子提供）
 - 13：前掲「ひめゆりの塔の記」1973年3月18日
 - 14：前掲「ひめゆり同窓会議事録」1974年6月19日
 - 15：建立の年月日は同碑に刻字
 - 16：前掲「ひめゆり同窓会議事録」1974年5月15日
 - 17：前掲「ひめゆり同窓会議事録」1975年6月23日
 - 18：同碑に刻字
 - 19：前掲「ひめゆり同窓会議事録」1977年3月10日・4月1日。8年後の1985年5月に花の押し売りを禁止するため花売り小屋を建設しているところから、看板が立っていても花の押し売りはその後も続いたと考えられる。
 - 20：「沖縄タイムス」1977年6月23日朝刊
 - 21：前掲「ひめゆり同窓会議事録」1977年7月2日。施工日は不明。
 - 22：前掲「ひめゆり同窓会議事録」1980年5月1日、7月6日理事会、1981年6月20日慰霊祭準備委員会
 - 23：前掲「ひめゆり同窓会議事録」1984年1月26日、5月11日
 - 24：1992年3月のひめゆり平和祈念資料館運営委員会（同窓生とひめゆり学徒隊生存者で構成）での聞き取りによる

仲宗根政善日記抄(53)

[1980年] 四月八日

昨日語学センターに用があって行った。博物館の前を通った。終戦直後まで首里へははいれなかった時に、教科書編修のための参考図書をさがしにという名目で、ハンナ教育隊長の特別のはからいで、トラックを出してもらった。首里には、一軒の家屋も残らず、緑の都として知られた旧都は、文字通り灰燼に帰していた。硝煙にくろずんで、破壊された石垣ばかりが残っていた。ただ一つ、首里教会の十字架だけが、破壊された教会の上に立っていた。なんというはかいのすさまじさであろうか。鬼気が身にせまった。石垣のこわれおちた道を用意深くたどりながら、やっと尚家前に来た。世持橋の欄干も破壊しつくされて刻んであった魚介の彫刻が散乱して足のふみ場もない。龍潭池の周へんは、一木一草すべて砲弾に射ぬかれ、枝が垂れさがり、新芽一つもない。繁多山のあの鬱蒼としていた赤木も骸骨のようにもたれかかって倒れている。尚家はすっかり姿を消して、弾痕があばたのように刻まれた石垣がやっと自分を支えて残っていた。尚家跡に入ると、かつて中ものぞけなかったのだが、青空に残骸をさらしている。残骸といってもただ礎ばかりが残り、宝物をおさめてあった倉のあったあとであろうか、中国製の陶器の破片がうず高くつまれている。燃える一切のものは焼けつくされて、火にも燃えないものはこなごなに打ち砕かれて、破片に美しい模様がわずかに残っていた。沖縄戦は醜い極地だといわれる。かつて琉球王国をきずき、中国や南方の島々とも交易して、富を積んだ。その時以来積んで来た宝物いっさいが、こなごなにされて、灰の中にうずもれているのである。

戦争前、尚家の前に立つと、左に師範学校があり、すぐ目の前に運動場があって、龍潭につき出た突端に枝ぶりのよい松が一本、池に影をうつしていた。右手の方には、池中に造られたあずまやがあった。もえるような繁多山の緑の丘に、首里城正殿の唐破風の葺がそびえ立って見えた。おもろにうたわれているように「なかべきよらぐすく」《中空にそびえる美しい城》であったのである。冊封使来島の時には、龍潭に、爬龍船を浮べたともいわれた。ところが今、池は幾万の将兵の流した血がしみてくろくよどみ、春の光にさえ水面がかがやかないのである。円鑑池にはかつて蓮の花がいっぱい咲いた。弁財天堂にはかつて朝鮮から一切経が

送られておさめられて、信仰の中心になっていた。戦争直前までけいけんな女たちが、いつもぬかずにいる姿が見受けられた。ところが、その真上に四百Kの爆弾が投下されて、堂の形が残らないどころか、池の底に弾痕が深くくいこみ小池になっている。優美な天女橋だけが、砲弾に破壊されながらもわずかにかかって残っていた。

尚家前に今立つと、樹木が生い茂り、前方はふさがれて、まったく展望にきかない。左側に琉球大学の男子寮の鉄筋コンクリートが立ちはだかっている。かつては、尚家門の左手龍潭に面して、擬椋梧〔擬椋梧のことか〕の巨木があって、そのかげにいつも人力車が二三台とまっていた。那覇への客を待っていたのである。秋になるとざるに蜜柑をもった女も座っていた。尚家の東南の隅にはものみやぐらが建っていて、国王が行列を外から眺めているともいっていた。

私は中学一年のとき、尚家のすぐ裏の新垣小(アラカチグウ)に下宿していた。沖縄で最後の駕籠作りの家であった。尚家の石垣にそういつもこのあたりをぶらついたのである。

もう昔のおもかげを伝えようにも伝えようもない。ただ過去の幻影のみがちらつく。流れ去るものは流れ去って消えて行くばかりである。誰かこんな感懐を抱くものがあるか。

[1980年] 四月九日

九死に一生をえて、はじめて辺土名で妻子にあった。岳父は山中で最期をとげておられた。十月十日の空襲で、那覇は一朝にして灰燼に帰した。爆撃の真最中に、妻子を家庭防空壕に残して、学校へ出かけなければならなかった。帰って猛火の中を妻子の行方を一晩中さがしたがわからなかった。隣りの上間一家に助けられながら、国頭へ国頭へと那覇から避難して行く避難民の群れにはいり、人々の情に助けられつつ、妻は二才になる紀子を背負い、五才になる民子の手をひいて、七才になる正子に荷を背負わせて、避難して行ったのである。しばらく今帰仁にいたが、長女おりえ一人を父母にあずけて、里の国頭辺土名に避難したのであった。戦争中は山奥にかくれ、食糧にはこまったが、どうやら生きのびて、妻子は元気であった。

私が訪ねた頃は、辺土名は、食糧事情がひどくわるかった。配給係が、蘇鉄の赤い実を数個ずつくばって回っていた。

情の深い母ではあったが、背に腹はかえられなかったのであろう。妻子をはやく石川にひきとってくれと言われた。戦争中から戦後にかけて里の方には、妻子四名をあずけて大変な苦勞をかけている。石川とても、うわさされるように食糧が潤沢ではなかった。しかし、赤い蘇鉄の実をみると、もうしばらく里において下さいなどとは言えなかった。喜久里真秀君と二人、石川学園の宿直室にとまらせて貰ったりして、教科〔書〕編修の仕事をつづけていた。妻子を迎える準備は全くしてなかった。いくたびも、喜久里君と市役所に足を運び、配給家屋を申出たが、なかなか許可がおりなかった。ねばりにねばって、やっと石川の最北端の素枯松の立っているところに建てられた規格住宅を与えられた。砂の上に建てられていて、床はなく、地べたにテントの切ればしを敷いて暮した。台風が襲って、壁はふきばかれ〔ママ〕、かたむきかけているのを一晩中支えてやっと一夜をあかした。母はマラリヤで高熱を出し毛布をかぶった上に台風が吹きつけた。戦争をやっとくぐりぬけて来たというのに全く生きた心地はしなかった。辺土名から妻子を迎えたが、食糧はいつも不足がちであった。隣りに妹節子とその三名の子供も住んでいた。夫はビルマ戦線に征ったうわさが風のたよりに伝ったきり、消息がなかった。しばらくして、ある晩、妹は泣きくずれてカバーヤ〔注〕の入口に立った。只今夫の死を知らせに来た友達があったというのである。ビルマの野戦病院で最期をとげたという。どう慰めてよいか。戦争中、三名の子供をつれて山中をさまよい命からがら生きのびたのである。辺土名の村はずれに、乞食小屋のようなところに親子三名のいるのを見て慰めようがなかった。ただ生き残りえた喜びだけをわけあったのであった。夫が生きて帰ってくれる。その希望をつないで、戦中、戦後の苦難をきりぬけて来たのである。その望みのつなぐふつりとされて、三名の幼い子供を前にして泣きはらしている。何というむごたらしいことか。何というつまらない戦争をしでかしたのか。妹の悲しみを見ていて胸のえぐられる思いであった。

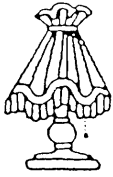
金城和信夫妻から、ひめゆり塔で最期をとげた生徒たちのお骨を白木の箱につめて、浄魂と表に浄書して石川に送られていた。私はカバーヤの角に、粗末な棚をつくって安置して、供養をつづけていた。それを伝え聞いて名護からも東村からも、

なくなった乙女たちの親たちがたずねて来た。訪ねて来るたびごと親の前で私は白木の箱を開けた。こなごなになったお骨はどの生徒のものなのか、全く見当もつかなかった。親たちは、ただ涙をぼろぼろこぼしているだけであった。

もう終戦から一年もたっていたであろう。カバーヤの中で、敏代に男の子が誕生した。母は産婆なので、辺土名からいらっていた。その頃は、簡単な床が出来ていた。生れた子は鼻すじ高い、いかにも上品な顔立ちだった。戦後の食糧の欠乏のせいであったであろう。兄姉たち〔と〕はちがって小さく生れていた。母も不安そうにとりあつかい無事に育つようにと心をこめていた。生れた喜びは大きかった。これで二男が出来たと喜んだ。しかし三日して、ついに朝露のように消えてしまった。かつて母を亡くした時のような悲しみに沈んだ。その遺骸は今帰仁に送って行った。名もなく浮世の光にわずかにあてられて、永遠に去って行ったのである。いまだ親の顔さえ眼をみひらいて見なかった。習慣でこのような幼児は本墓に葬るものではないというので、親戚の墓の前の側壁にささやかな墓を掘ってうめた。あれ以来、妻と一度もあの子の話をしたこともない。悲しみを胸のおくにおしこんだままである。夜おそくときどきあの顔立ちのよかった生れたばかりの顔を思い出す。(中略)もし戦争がなかったならばこの児もすこやかに育っている。身内に犠牲もなく仕合せであったとも思いつづけているのだが、戦争の犠牲はやはり私どもにもあったのである。家族が全滅したり、あるいは親を失い、夫、妻、兄、姉、妹と肉親を失い、沖縄県民全体が遺族であり、その悲しみは限りなく深く、地底は慟哭にみちているのである。この上に墓地がいつまでも築かれている。この地底の慟哭がたえず訴えてくる。

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。
※〔 〕は編集で補った。旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。

〔注〕カバーヤ：米軍払下げのテントを利用してつくった家屋のこと。初めのうちはテントを地べたに立ててそこに生活していたが、やがて角材（ツブ・パイ・フォー）が入手できるようになり、簡便な規格家などが建つようになって、屋根や壁にはテントが用いられた。このカバーヤ、テント屋時代は戦後しばらく続いた。（『沖縄大百科事典 上巻』沖縄タイムス社,1983）



本棚

仲程 昌徳

大城将保『石になった少女 沖縄・戦場の子どもたちの物語』

沖縄戦の特徴として、石原昌家は「三か月あまりにおよぶ日米最後の地上戦闘の結果、戦闘員の戦死者よりも非戦闘員である一般住民の戦死者が多い」（『証言・沖縄戦 戦場の光景』）といった点をあげ、沖縄県援護課がまとめた「沖縄戦戦没者総数」を掲示していた。それを見ると米兵一万二五二〇人、本土出身兵六万五九〇八人、沖縄出身軍人軍属二万八二二八人、一般住民九万四〇〇〇人となっていて、前三者の戦死者総数と一般住民のそれとは大差ないが、「沖縄出身軍人軍属には、一五歳前後の男女から六〇代の男性まで学徒隊・防衛隊・義勇隊として召集されて戦死した者が多数含まれているので、この記録だけでも一般住民の戦死者数が、戦闘員のそれを上回る事が明らか」であるとした上で、さらに語を継いで「私たちの調査で一般住民の戦死者数は、この公式記録をさらに上回ることが証明」できたと付け加えていた。

実際のところ「沖縄戦の戦没者の正確な数字はまだよくわからない」（安里要江 大城将保『沖縄戦 ある母の記録』）とはいえ、石原が指摘しているように「一般住民の戦死者数が、戦闘員のそれを上回る」ということは、自ずと数多くの戦災孤児を生んだということを物語るものとなっていた。それはまた、戦災孤児の収容施設が十カ所ほど開設され、ある時期、収容人員が約一〇〇〇名に達したという記録がある（大城将保『沖縄戦 民衆の眼でとらえる「戦争」』）という点にもよくあらわれていよう。

これまで沖縄戦は「鉄血勤皇隊」や「ひめゆり学徒隊」によって語られてきたが、「本当に沖縄戦の悲惨さを語れるのは、戦闘で父母や兄弟姉妹を失い天涯孤独の身になって戦後を必死に生き抜いてきた戦争孤児だったのではないか」（佐野真一『沖縄戦いまだ終わらず』）と言われるなかで上梓されたのが大城将保の『石になった少女 沖縄・戦場の子どもたちの物語』であった。

大城は、「沖縄戦から七十年目の今日、沖縄戦を記憶している最後の世代になった私たちは何を為すべきか、が問われて」いるといい、疎開したため沖縄での「戦場体験のない私にも何かの役目はないものか」と考えたとき、あの収容所のなかのテント教室で

空き箱の机をならべた同級生たちの顔が浮かんで来たという。そして「彼ら全員をモデルにして、数人の登場人物に凝縮」して書いたのが本書であると述べていた。

作品は、「これからはじめるぼくの話というのは、その孤児院で知りあったひとりの少女のことです。宮里ユリという子どもが、村のはずれの人待ち峠で家族との再会を待ちつづけているうちに、とうとう石に化身してしまったという不思議な物語です」と、最初に打ち明けている通りのもので15の章からなるが、大別すると1 孤児院でのぼくたちの生活、2 宮里ユリの短い生涯、3 戦後七〇年目の話の三話で構成されている。

1では、沖縄系ハワイ二世の投降呼びかけを無視し、壕にひそみ、やがて栄養失調と戦争マラリアで両親がなくなり、意識不明のまま助け出されたぼくが、収容所で、境遇を同じくする孤児たちと暮らしていく日々を、2では、ユリと呼ばれる少女の戦場体験および肉親との再会を心待ちにして、収容所の近くの峠へ通い詰める姿を、3では、大阪にいた叔父さんに引き取られたぼくが、戦後七〇年を前にして、かつて過ごした孤児院のあった場所を訪れ、「石になった少女」の伝説を聞く、といったものである。石になった女の伝承としては、「野底マーペー」の話がよく知られている。八重山民謡「チンダラ節」の解説（喜舎場永珣著『八重山民謡誌』）を読むまでもなく、作者自身が紹介しているように「くる日もくる日も泣きつづけ、執念のあまり石に化身しまった話」として伝えられているものである。

「石になった少女」の発想は、明らかに「野底マーペー」の伝承に負っていたとあっていいが、それは、弱い者が、最も大きな犠牲を被るということと共通するものがあるとする認識によっていたはずである。石のように黙して語ることなく闇に消えて行ってしまったに違いない戦時の出来事を、どのように掘り起し伝えていくか、その試みの成果の一つが本書である。本書の姉妹編ともいえる鳴津与志（本名大城将保）の『かんからさんしん物語 沖縄戦を生きぬいた子どもたち』と合わせて読んでほしい。

声

ひめゆりの少女の話は私達にもつながる

(韓国 金美廷 済州と沖縄を結ぶ会会員)

私は今、花を見えています。資料館に入る前に見た花壇の花です。窓ガラスの外にある花はただの花には見えません。資料館で逢った少女達の顔が私の胸に溢れて、花から70年前のひめゆりの少女達の姿が出てきます。思春期の少女の笑い声が聞こえる気がします。友達と手をとって校庭を歩いている少女も見えます。

その時も花は暖かい日に当たり明日を待ってたでしょう。

花びらがそよかぜに触れられたでしょう。

少女達の将来の夢も育てられたでしょう。

しかし、少女達にはそんなことが出来ませんでした。勝手にこの花壇に侵入した戦争のせいです。

資料館を見ながら、高校生だった1980年代のことを思い出しました。

私の国韓国では、学校で週に1回、兵士の訓練の授業がありました。男子学生は軍人の服と似た訓練服を着用して銃剣術を学びました。女子学生は戦争の時に必要だとされて看護技術を学びました。先生の中には退役将校や看護大学出身の新人教師などがいて、その人達の授業は厳しかったです。今更ですが、韓国ではある時期、大統領と政治家が日本の軍国主義政治をマネしたのだという気がします。学校の教育を通して私達に戦争の準備をすることを強要したものでした。

日本が敵を米軍だとしたのなら、韓国では北朝鮮、つまり敵になった北の人を睨みながら、戦争の時は人を殺してもいいと教えることでした。それは「反共教育」という名前で私達に注入され、私は、疑問を持たずに正しいこととして受け入れました。

資料館の少女の顔の中に私の顔や私の友達の顔が見えました。ひめゆりの少女の話は、私達の話にもつながります。もしかすると私達も同じ道を歩んだかもしれません。

それぞれの国の政治家が、自分の考えが間違っていると認めない限り、私達は政治家に利用される道具になります。学生を戦争に動員することを当然と思い、国民に愛国を強要する政治家は昔話ではありません。「国のため」という言葉には恐ろしいほどの意味が隠れていたと思います。政治家は自分のために国民を戦場に動員しても、戦争のもたらした悲惨なことからは責任逃れをします。それらのことをよく知らせるひめゆり平和資料館に感謝します。ほかに、ひめゆり資料館が設立から後の管理まで国家の力を借りずに自力運営することはとても素晴らしいです。韓国の我々も学ぶべき姿勢だと思います

資料館の動き(2015年度)

- | | |
|----------------|---|
| 2015年 4月 | 職員による「次世代の平和講話」開始 |
| 6月23日 | 第70回ひめゆりの塔慰霊祭 |
| 7月11日 | 戦後70年特別企画「戦跡めぐり—ひめゆり学徒隊の足あと」実施 |
| 8月5日 | 2015年度教員向け講習会開催 |
| 8月13～15日 | 「夏休み元ひめゆり学徒の戦争体験講話」開催 |
| 8月23日 | 教員のための展示ガイドツアー開催 |
| 9月19～23日 | 戦後70年企画「映像でたどる ひめゆりをめぐる沖縄戦の記憶—ひめゆりの映像作品上映会」開催 |
| 10月 | 伊原第一外科壕の地盤地質調査実施(2016年3月終了) |
| 10月24・25日 | 平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会に副館長が出席 |
| 11月19・20日 | 第22回日本平和博物館会議に館長・副館長が出席 |
| 28・29日 | 日本平和学会2015年度秋季研究集会大会に職員3人が参加 |
| 12月20日 | 長崎市継承フォーラムに職員2人が参加 |
| 12月22日 | 戦後70年特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」開幕(2017年3月31日まで) |
| 2016年 2月8日～12日 | ひめゆりの塔敷地内ボーリング調査実施 |
| 3月14日 | 2015年度ひめゆりガイド講習会開催(28日に追加開催) |
| 23日 | 戦後70年特別展『ひめゆり学徒隊の引率教師たち 図録』発行 |
| 27日 | 教員のための展示ガイドツアー開催 |

資料館ガイド

◆お知らせ

①予約受付が1年前からになります。

現在、半年前から受け付けている「次世代の平和講話」や「証言ビデオの上映」など多目的ホールのご予約が、2016年9月1日より、1年前から可能となります。

○現 行：半年前の月の1日 例：2017年9月分の予約開始 2017年3月1日 9:00～

○変更後：1年前の同月1日 例：2017年9月分の予約開始 2016年9月1日 9:00～

※2017年3月1日～2017年9月31日までのご予約開始が2016年9月1日になります。ご注意ください。

②サマータイムを実施いたします

2016年7月1日～8月31日までの間、試みとしてサマータイムを実施いたします。

開館時間が1時間延長され、受付終了時間が18時に変更となります。

○現 行：9:00～17:25（受付終了17:00） → ○変更後：9:00～18:30（受付終了18:00）

◆多目的ホールご利用のご案内

当館ではひめゆり学徒隊や沖縄戦について学ぶための平和講話（約45分）、またはビデオ視聴を事前予約制で承っております。ご予約時間は以下のとおりです。お電話にて空き状況を確認後、FAXかメールにて申込書をお送り下さい。

【講話・ビデオ】 9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00

※ビデオ作品 ○証言ビデオ「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」(25分)

○アニメ「ひめゆり」(30分)

※毎週月曜日・年末年始（12月30日、31日、1月1日～3日）・旧盆（旧暦7月13日～16日）は講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後（6月21日～24日）は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

●収容人員：約200人（席）

●資料館へ入館していただく場合に限らせていただきます。

●多目的ホールは講話及びビデオ視聴以外の目的（セレモニー等）には利用できません。

●予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルさせて頂くこともございます。

◆VTR室のご利用について

次のビデオ等を視聴することができます。詳細はお問い合わせ下さい。

○「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」(25分 1994年) ○アニメ「ひめゆり」(30分 2012年)

◆資料館ご利用案内

①入館受付：午前9時～午後5時（閉館は午後5時25分） ②休館日：年中無休

③入館料：大人¥310/高校生¥210/小・中学生¥110

団体料金(20名以上)：大人¥280/高校生¥190/小・中学生¥100

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第57号

2016年(平成28年)5月31日発行

編集・発行 公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館

〒901-0344 沖縄県糸満市字伊原671-1 ☎098-997-2100

URL <http://www.himeyuri.or.jp/>
